

## 説教「主はわれらと共に」

イザヤ書 9章1～7節、マタイによる福音書 1章18～25節（口語訳聖書）

1975.12.21

クリスマス礼拝

日本バプテスト同盟 関東学院教会

主の御降誕を待ち望んできましたが、今日このように皆様と一緒に主の誕生を祝う讃美を歌って主を迎えることができ、心から感謝をします。そして、クリスマスおめでとう、と申し上げます。

『見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう』。これは、『神われらと共にいます』という意味である」（マタイ 1：23）。これは、「主が預言者によって言われたことの成就するためである」（同 1：22）とあります。今朝は、神が御子において御心を成就したもうたことの意味を考えてみたいと思います。

まず忘れてならないことは、神は高い栄光の座から下りて御自分をむなしくし、身を低くして、私たちのもとにまで来たりたもうたということでもあります。私たちと共に住むために、名もないおとめマリアの胎を用い、人間として来たりたもうたのであります。

旧約聖書において、神はエジプトからイスラエルの民を救い出し、荒野に導かれました。そして、神はモーセに、幕屋を建てることを命じられました。それは、天にいます聖なる神がイスラエルの民の中に住むためでありました。出エジプト記 29章 45～46節に、「わたしはイスラエルの人々のうちに住んで、彼らの神となるであろう。わたしが彼らのうちに住むために、彼らをエジプトの国から導き出した彼らの神、主であることを彼らは知るであろう」と記されています。その昔、神はイスラエルをエジプトから救い出したということだけでなく、彼らの中に住むことによって、イスラエルの神であることを知らせようとされたのです。

ただし、神の住みたもう聖所である幕屋は、その周囲もその中も、あらゆる祭壇の設備や備品などが汚れや罪から清められねばなりません。神は聖なる幕屋に現れますが、ですから民の中に住むということは、民の汚れを受けずにはいられないことも承知のうえで、あえてイスラエルの民の中に住むことを良しとされたということです。それは、神が彼らと共にいるためでありました。苦しい荒野の旅を共に歩むためでありました。旧約聖書の神は、その本質からしてこのように、民と共にいようとされる神であります。

モーセは荒野にいたとき、初めて神の召しを受けました。「エジプトに行って、苦しむ同胞を救い出せ」と。しかし、モーセは何やかやと言い訳を並べ立てて断り、尻込みしました。そのとき、重いモーセの腰をやっと上げさせたのは、熱心なる神の言葉でありました。すなわち、「わたしは必ず、あなたと共にいる！」でありました。さらに、「神様の名前は何かというのですか？」と尋ねるところが出てきます。このイスラエルの神の名前を「ヤーウェ」と発音しますが、その名の本来の意味も「共にあろうとする」という意味だと言われています。

このように、イスラエルの歴史を通して、神はイスラエルにとって「インマヌエル」の神であることを、すなわち「神われらと共にいます」の神であることを示しておられるのであります。今朝の預言者イザヤもまた、そのことを語っています。実際、イスラエルの民が弱く、どんなにか苦境に立たされたときでも、あるいは神に背き、本来の神を捨てて偶像の神々に走ったときでも、さらにはイスラエルが滅亡して、敵国に捕虜の身となったときでも、神はなお共にいてくださったのであります。

御子の御降誕はこのインマヌエルと呼ばれる者としての御降誕であり、これによって旧約の預言が成就したとこで言われているのはこのような深く長い背景から見てのことで、歴史を貫く神の御意思が御子において実現したことを物語るものです。神が御子において共にあろうとして、私たちと同じ肉体をとって来たりたもうたのであります。それは、弱さ、汚れ、罪を持ったままの私たちと共にあろうとするためでした。弱さ、汚れ、罪を私たちと共に負ってくださるために来たりたもうたのであります。

そうだとするなら、私たちがたとえどんなに他人から見捨てられ、責められ、嫌われ、孤独の中に打ち沈み、悲しみのどん底に落とされようとも、神はそこに在したもうのであります。神などおりもしないのに、神が共にいるから信じなさい、と虚しい勧めをしているではありません。神は私たちのただ中に来られたのです。ただ、私たちはそれに気づかず、本気に考えようともせず、目を閉じ、耳を塞いで過ごしているのであります。

クリスマスは、自分で自分の目を閉じ、耳も塞ぎ、口も開かなくしているこのような自分というものから、すなわち自分のひとり善がりから解放される時です。光が心の闇を照らす時です。そして、目を開かせ、耳を澄ませ、口を開かせて、神を讃えさせる時であります。それですから、クリスマスを表面的に過ぎ去らせてはなりません。心の深みにおいて受け止めなければなりません。御子において私たちの魂の深みに入り来るために、神はマリヤのお腹に宿りたもうたからであります。神はわれらと共にあろうとして、身を限りなく低くして来たりたまいました。ヨハネ福音書の 1章 14節に、「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」とあります。この神の深い御旨を心にしっかりと受け止めねばなりません。

次に、キリストの到来は闇を照らす光とされていることでもあります。それはどういうことを表現しているのでしょうか。光は闇を照らし出すものです。私たち弱く汚れた人間の現状はどうかと申しますに、いつも自分中心に物事を考え、行動します。自分の内に小さな誇りを持っており、いつで

も他人から良く立派に思われようとする。他人よりは少しでもましな人間であろうとし、また ましな暮らしがしたいと考える。一方、反対に自分のちっぽけな誇りを傷つけたり無視したりする者に対しては敵意を抱き、身構え、警戒します。そして、自分をその能力以上に示そうとして焦り、本当の自分でないものをつくり出す。すなわち、これが偽りですが、それが自分の中に入ってきます。そのとき、そうすることの虚しさを感じるようになりますが、これが闇の中にいる私たちの姿であります。聖書はこれを、罪に墮ちている人間と言います。この罪人は神から遠ざかり、神をしりぞけ、自分を高くし偉くして、立派にしようとしています。いつも、自分を人に誇ろうとします。そして、そのために虚しい努力をする。自分を自分以上に高く偉くするために他人を扱き下ろし、過小評価し、軽蔑し、それによって自分を高い者にしようとするのです。そして、憎しみや嫉妬が心の内に鎌首をもたげてくるのであります。

この罪の現実の中に、すなわち闇の中に、神は私たちと共にあろうとして来たりたまいました。神はそのとき、私たちのあるがままの自分のところに、つまり飾りや見せかけの自分ではなく 素顔の自分のところに来たりたもうたのであります。

この方は、自分の家の中にお入れして失礼があっては大変と大騒ぎしなければならない、気難しい、口喧しいお客様ではありません。神はこともあろうに、馬小屋の飼葉桶の中にぼろを纏って来たりたもうたのであります。イエス様がお生まれになったとき、人間の住むまともな部屋はありませんでした。そこしか、主イエスをお入れする余地がなかったのです。

それにしても、どうした訳でこんなにもみすぼらしく暗い所にお生まれになったのでしょうか。それは、この世の惨めで恥ずかしい罪の生活のそのただ中に来て、共に住むためでした。あるがままの自分の、すなわち弱虫で臆病で、偽りに満ちた虚しい見せかけの努力をしている 儂いこの私たちの友となるために来たりたもうたのです。そして、私たちの過ちや失敗の結果を一緒に担ってくださり、その罰を受け、苦しみを負い、ついには私たちの罪の代償として死んでくださるために私たちのもとに来たりたもうたのであります。それによって、私たちを神の前に立つことのできる者とするためでした。このように、御子イエスの誕生によって、私たちが罪と闇の世界にいることが照らし出されたのであります。

読んでいただいたマタイ福音書 1章 18節以下のところを見てみましょう。

ヨセフとマリヤは婚約中であつた。ところが、マリヤは聖霊によって身籠もります。ヨセフは社会通念から判断して、困ったことになった、と思ひました。二人の間には、妊娠するような関係はなかつた。とすると、普通であれば、マリヤは他の男と交渉があつたと判断せねばなりません。それが公になれば、マリヤは恥を晒すだけでなく、法に訴えられれば、不道德の罪として処刑されねばなりません。人間の常識からして、また当時の社会の法から見て、マリヤを救済する方法としてヨセフが考えたのは、密かに婚約を破棄するかして、関係がなかつたことにすることでした。神の子イエスはこのように、マリヤとヨセフの婚約関係という間柄の中において、マリヤの胎に宿つたのであります。マリヤに子どもが生まれるということがあつてはならないし、あつてほしくない、という状

況の中で宿ったのでした。なんという不遇の中に生まれねばならなかったのでしょうか。人間社会の常識からしたら、そんな形では子どもに生まれてほしくない、という生まれ方です。だが、そういう子として生まれたのであります。これは一体、どういうことでしょうか。

私は、あえて言わせてもらうなら、こう思います。<sup>こんにち</sup>今日の人間社会の中、そんな不遇で不幸な関係の中においても、そしてそんな関係の中で生まれねばならない運命を担った子であっても、神は正しくその人々のただ中であって共にあろうとしておられる、ということでもあります。

これは現代の人々が持っている問題と関わりがあるように、私は感じます。例えば、ある男性と女性が親しくなり、まだ学生の身である間に子どもが出来てしまったとします。これは珍しくない例です。両親がそれを<sup>ふしようぶしょう</sup>不承不承であっても認める場合は、結婚ということで解決の道が開けます。しかし、ある場合はそのようにはいきません。特に、男の方の両親が承知しないとしましょう。もっとほかの女性を息子の妻に、と考えていた。子どもが出来たとなれば、なおのこと世間体が悪い、家の不名誉になる、家に傷がつく、と思うようになる。だとしたら、どうするか。<sup>なか</sup>お腹の子を下ろしてしまえ、と。そして、何事もなかったかのようにして闇の中にすべてを葬り去り、公にしないように隠してしまう。女性の立場を考えない、男性の側の無責任な問題処理の仕方です。ヨセフはしかし、似たような恥の中に立たされましたが、それに負けてしまわないで、「共にいる」と言われた神のお言葉を信じて、24節にあるように「主の使いが命じたとおりに、マリヤを妻に迎えた」のであります。

20年も前の話ですが、米国では不幸にもこういう関係で男性から捨てられた妊娠の女性を保護する施設があり、そこへ行って話しをするように頼まれて、一度行ったことがありました。女性は責任をもって結果を負い、子どもを産み育てようとするのです。この施設は、妊娠の女性がそこで赤ちゃんを出産できるように助けてあげます。そして、闇に葬ることから守っているのです。

イエスの誕生は、このような状況にある女性たちと共におり、また新しく生まれる魂と共に生きるためにあった、と言うこともできます。現代のこのような男女の間に起こっている問題に、<sup>みこ</sup>御子の誕生は大きな光となり、救いとなっていてくださるのです。

21節を見てください。「彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」とあります。<sup>みこ</sup>御子イエスはその名のごとく、罪に陥っているすべての人の友となり、罪を担い、その結果を完全に背負って<sup>つみびと</sup>罪人を救う方として生まれ、この世に來たりたもうたのであります。社会の通念、道徳、習わしの拘束力を恐れて<sup>みづか</sup>自らを偽り、見せかけ、人目につかぬようにカモフラージュして過ごそうとするそんな人間社会の中に主は來たりたもうた。そうした人間社会の法からはみ出たところに自ら生まれることによって、社会から軽蔑され、見捨てられ、葬られようとする者と共にあって、救いとなりたもうたのであります。御子の誕生は私たちのこの世的な目では恥と軽蔑の中に身を晒す<sup>さら</sup>といった状況にあってもその人の救いとなり、喜びとなる出来事なんだ、ということを知らねばなりません。

神の恵み深い御心<sup>みこころ</sup>の前には、赦<sup>ゆる</sup>しえないようなどんな罪も恥もありません。私たち<sup>つみびと</sup>罪人に対する、人類に対する神の愛はそれほど深く大きいからであります。どこに、ろくでなしの人のために自分の子を犠牲にする親がいるでしょうか。しかし、神は御子<sup>みこ</sup>において、その独り子を賜<sup>たま</sup>うほどに世の人々を愛しておられる。この福音を、私たちは聞かされたのであります！

それですから、私たちは、この神の驚くべき愛の贈り物をただ身を低くして頂かねばなりません。ただ感謝して頂くことであります。感謝以外にないのです。取るに足らないこの私たちのためにすべての良きものを惜しみなく注ぎたもうたその神に、ただ感謝をしましょう。私たちの虚<sup>むな</sup>しい、偽りの、見せかけの空虚な心に神の愛のしるしである御子<sup>みこ</sup>を心一杯受け入れて、喜びと感謝で満たされましょう。そして、ベツレヘムの飼<sup>か</sup>い葉桶<sup>ばおけ</sup>の中に御子を生まれさせたもうた神の御名<sup>みな</sup>はなんと素晴らしいか！ と力を込めて、神を讃美<sup>さんび</sup>しましょう。声を上げて神に讃美<sup>さんび</sup>を献<sup>ささ</sup>げるとき、天使たちもわれらに和して讃美してくれれます。一人ひとりが心の底から、御子イエス・キリストを私の救い主、私のキリストとしてお迎えいたしましょう。このような共にいます神、イエス・キリストと共にこの年を終え、新しい年へと進みたいものです。